☆世界同時革命・世界革命戦争
世界プロレタリア独裁
共産主義勝利！
共産主義者同盟

5月10日
第27号
編集発行人 南 安明
一部 30円
購読料 半年 600円（〒共） 1年 1,200円（〒共）

蜂起

蜂起社
発行所 蜂起社
渋谷区広尾5の16の1
北村第一ビル内
TEL 03（446）0832
（振替）東京 1512

5・13 ■反帝戦線総決起集会（6時新橋区民会館）
・14 ■沖縄返還式典粉砕派兵阻止全国○起戦争派中央総決起集会（6時豊島区民会館）
・15 ■（3時清水谷公園）
20・21 ■北熊本派兵解体闘争（現地闘争）

派兵前段直撃の戦果ふまえ
5・15記念式典粉砕に総結集せよ

5・11
反帝戦線遊撃隊
防衛庁、新宿地連を強襲

五月十一日、午後七時〇分、わが反帝戦線遊撃隊は、防衛庁と自衛隊新宿地連を同時強襲し、全員が帰還した。

自衛隊沖縄派兵の中心であり、四次防制定の中心であり、自衛隊三軍の司令部である防衛庁と、自衛隊の隊員獲保の任を持つ地連を同時攻撃することによって、わが反帝戦線遊撃隊は、帝国主義軍隊ー自衛隊解体の方向をはっきりと指し示した。

そして、われわれが一貫して主張してきた「自衛隊沖縄派兵前段直接攻撃」を、身をもって実践した。

この遊撃隊の英雄的な闘いは、同時に、火炎ビン立法に対するわれわれの断固たる回答でもある。

そして以上のことを、文字通り遊撃戦として貫徹することによって、わが公然軍団の質を、階級闘争のなかに、はっきりと刻印したのである。

爆弾破壊戦と連続する銃声が響きわたった日本階級闘争の到達地平を、我々は、しっかりと握りしめなければならない。

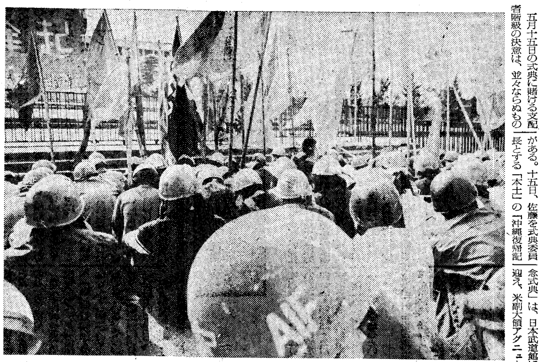
昨秋四・二八蜂起戦争派武装三派集会は、はっきりと国際階級闘争の転回軸が共産主義を軍事に組織する党の地下正規軍の非公然戦闘とその質を受けた公然軍団の権力重心に肉迫し、これを粉砕し、帝軍を支えるイデオロギーを、そして軍そのものを党の軍隊が根底的動揺に叩きこむことであることを明らかにした。

以降の階級闘争は、まさにその物質化・実践である。米中ソ三角核均衡後の日帝の新たな対中牽制外交と「尖閣列島」領有、沖縄自衛隊派兵・5・15「返還」式典・沖縄軍事支配にともない、国内での狂乱の反革命攻撃は、先ファ権力のもとに人民戦線派を包摂し、天皇イデオロギーをかつぎ出し、反革命軍事勢力、民間右翼の組織に狂奔している。

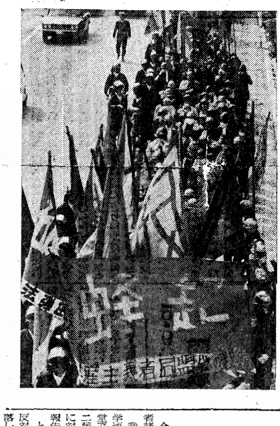
我々は、この攻撃にひるむことなく、4・28闘争以降の核心を手離すことなく、しっかりと握りしめ、5・15、6月闘争を蜂起の大道先進国建党・建軍闘争に向かって大胆に前進する。

全世界武装革命勢力と固く結合し、世界同時革命・世界革命戦争・世界プロ独・共産主義勝利に向け！

（詳細次号）



4・28実行委を領導し前進するAIF・叛軍（詳細2面に！）



5・15日帝の沖縄軍事支配開始と対決し
5・21北熊本派兵自衛隊直接攻撃へ

全都・全国の革命的同志諸君！「蜂起」購読者諸君！そしてすべての先進的労働者・農民・学生諸君！歴史的な五月一五日が、目前に迫っている。この日帝の沖縄軍事支配開始の日、そのことを〃祝賀〃しようとする「式典」を粉砕し抜くことは、まさしく重大な意味を持っているのだ。この日帝の沖縄支配の質に無自覚なすべての部分は、中核派から宮下派、労共委に到るまで、「この日」の持っている意味を、明らかに出来ないでいる。こうした諸党派の混迷はおしなべてその沖縄闘争「論」が一国主義的性格を色濃く持っていたことに規定されている。わが共産同（蜂起派）と反帝戦線、蜂戦派叛軍は、こうした一国主義者に対して、一貫してプロレタリア国際主義を、現下の階級闘争の生きた指針として堅持してきたその伝統にふまえ、「派兵阻止・式典粉砕」に向け、さらに前進し続けるであろう。すべての同志諸君！共産主義者同盟（蜂起派）とともに派兵前段直撃・式典粉砕に向け、さらに前進せよ！帝国主義軍隊＝自衛隊沖縄派兵阻止を闘い抜き、自衛隊を解体的動揺にたたき込め！

蜂起戦争派、赤ヘルは清水谷へ

五月十五日の式典に賭ける支配者階級の決意は、並々ならぬものがある。十五日、佐藤を式典委員長とする「本土」の「沖縄復帰記念式典」は、日本武道館に天皇を迎え、米副大領アグニュー以下内外一万人の参加を予定している。そして、この「本土」における式典内容、とりわけ天皇の「言葉」のマイクロ回線による同時中継を主要内容とする「現地」の式典が「本土」政府の主催によって開かれる。天皇の姿を沖縄にカラーで写し出すために夜を日に継いでマイクロ・ウェーブの工事が行われすでに完成している。五月十五日のその日から日帝は、その沖縄軍事支配を、旧軍の統合基軸であり人民を帝国主義戦争へと動員するナショナリズムのイデオロガー基軸であった「天皇」を沖縄人民の眼前に突きつけることによって、むき出しに表現しようとしている。まさしく、天皇の名において沖縄人民は沖縄を「本土」防衛の戦場とすることを要求され、米軍によって殺されたのみならず、ヤマトの軍隊によってもその天皇の名において虐殺されたのである。

再び、その天皇のもとに、イデオロギー的に統合されんとしている新日帝軍＝自衛隊の沖縄派兵を目前にして、そのことを祝う式典に対しては、あの屋良でさえ、「再考」を求めたのである。それに対して、日帝佐藤政府は、このおずおずした申し出をも拒否し、断固としてこの沖縄軍事支配宣言式典を強行することを明らかにしたのだ。

ここに、日帝の今後の沖縄支配の姿が、すでに示されている。たしかに、沖縄移駐の第一部隊である「第一混成群」の出発は七月十五日以降に延期され、派兵要員も「久保・カーチス協定」で決まった「復帰日から約六ケ月以内に約三千二百人」を「二千九百三十人」に減らしてはいる。しかし、このことは、「本土」・「沖縄」の階級闘争との関係で一時的に様子を見ていることを示しているにすぎない。それを何よりもはっきりと示しているのが、現地での式典強行であり、天皇のカラー中継である。日帝は、沖縄人民の意識のなかに、「日本ー天皇ー自衛隊」という連鎖が形成されていることを十分知りつつ、自衛隊を派兵するためにその前段における沖縄人民とのイデオロギー的対決として、本土・現地の式典を同時に強行しようとしているのだ。それは、七月十五日の本格的派兵の開始までに沖縄人民の反自衛隊感情を天皇を前面に押し出すことによって圧殺しておこうとする支配者階級の露骨なイデオロギー攻勢なのだ。

こうした、式典にかける日帝権力の攻勢の質を見抜くことなく、相も変らず「ペテン的返還」だからその「返還政策」に対決し、「沖縄奪還闘争を断固貫徹」すると主張し続ける中核派や、「返還粉砕」だから「記念式典粉砕」なのだという形式論理をふりまわす宮下右派は、沖縄闘争の新たな段階への展開に対応することが出来ずその混迷をさらに深めるであろう。

唯一、わが同盟だけが、日帝の沖縄支配の質を「日帝の沖縄軍事支配」として規定し、「本土」における「派兵阻止闘争」と「現地」における「日帝軍事支配反対闘争」（沖縄における自衛隊配備反対闘争はこうした質を内包している）とを統一し、本土ー沖縄を一体とした蜂起への戦略的展望を与え得ているのである。

同志諸君！我反帝戦線とともに派兵前段直撃ー式典粉砕に進撃せよ！

五月十五日は、同時に日帝権力が釣魚台（尖閣列島）の領有を、さらに公然と宣言しF一〇四ジェット戦闘機隊の沖縄到着と同時に釣魚台をもその「防空識別圏」に編入せんとする日である。すなわち、日帝は沖縄を東南アジアにおける侵略・反革命のキイ・ストーンとして確保することを宣言するのみならず、そのことが中国人民東南アジア人民に対して何を意味するかをも同時に突き出そうとしているのだ。

日帝は釣魚台周辺の大陸棚に眠っていると推定されている膨大な石油資源を自己の手中に収め、かつ米中ソ三角核均衡下において、その帝国主義的世界戦略を核を背景として推進し得ない[illegible]を、日米安保堅持・対ソ接近・対中牽制として乗り切っていくうえで決定的な環となる対中国反共ナショナリズムの形成を、この日をもってさらに本格化しようとしているのだ。

日帝は、こうした帝国主義的、排外主義的イデオロギー攻勢を、もはやおずおずと行なおうとはしていない。天皇を前面に押し立て、「式典」を行なうことによって、公然と、しかしレベルを一約あげてなさんとしているのである。

こうした、五・一五式典を軸とした日帝権力の攻勢の全面化に対して、われわれは何を基軸として対決すべきなのか。疑いもなく「国際主義」である。

第一に、日帝の釣魚台（尖閣列島）領有に対決し抜くことである。このことに無自覚、ないしは屈服している社共、革マルは、すでに排外主義に転落している。

そして、日帝のこの領土問題における攻撃に対して、単に「日帝の領有反対」をいうだけでも不十分である。自国帝国主義の領土的野心に対しては全て反対すべきだという原則だけにたって、この釣魚台問題に対処することは、不十分であるばかりではなく、日本帝国主義の単純打倒主義という一国主義におちいる危険を持っている。中核派の主張はこうした傾向を色濃く持っている。

われわれは、釣魚台に対する日帝の野望が、石油資源の確保とともに、対中反共ナショナリズムの形成を狙っていることをみるならば、断固として釣魚台の中国「労働者国家」領有を主張しなければならない。そして、そのことは、われわれの世界同時革命戦略において、また現在においては、米中会談にもかかわらず、国内に階級矛盾はないというソ共と国内における階級闘争の存在を認めている中共への評価は異っているということにも規定されている。

第二に、ベトナム人民の総反攻と連帯し、自衛隊の沖縄派兵に対決し抜くことである。

米帝はついに、五月九日、北ベトナム全港湾の機雷封鎖と北ベトナムへの全輸送網の切断に踏み切った。この狙いは、北ベトナム・南ベトナム民族解放戦線そのものに対する速効的直接的な効果にあるのではなく、中・ソ、とりわけ五月二十二日に米ソ会談を予定しているソ連に向けられたものである。米帝のこの措置によって、ソ連はベトナムの援助を続け、国際的な中共派との党派闘争を有利にするためには米帝との局地的ではあれ対決を余儀なくされ、他方米帝との対決を避ければ、ベトナム人民を見殺しにすることになり、国際的な中共との党派闘争において決定的に不利になるというジレンマに立たされている。ニクソンは、そうした位置にソ連を置くことによって、ベトナム人民の戦いを、ジュネーブ型解決へ、すなわち米中ソ三角核均衡の枠内での解決へ向かわせるようさらに努力を払えとソ連を恫喝しているのだ。そして、ソ連はいまこの恫喝に屈しつつある。

だが、ベトナム人民の戦いは、こうした米中ソ三角核均
破る能動性、主体性を持
であり、その故にこそ全
トナム反戦闘争の波を作
のであり、過渡期世界の
体的に把え返す契機をわ
与えたのである。われわ
進国武装闘争の本格的段
しあげを、狂乱の反革命
って実現していくなかで
ム過渡的革命戦争の持っ
族共産主義的限界をも止
かねばならない。

第三に、日本における
合法党の形成を軸として

5・6
反医学会総会に断乎として登場

全国の同志諸君！「蜂起」購読者諸君!!

我がAIFと保全共・破弾闘医学連の同志は、5月6日東大南講堂で行われた反日本医学会を宮下二派、明治二派の無方針・無対応に対して革命的に登場したことを報告する。

とりわけ、わが同盟から「軍事反対派」「革マル主義」として脱落し、昨秋10、11月闘争を日和ったばかりか、破防法事務局員倉田同志を背後から襲い瀕死の重傷を負わせ、完全に階級闘争の反革命的存在になった日向一派は、破防法事務局からパージされ、苦肉のデッチ上げ組織たる「伊達さんを守る会」の本集会の登場をもって自らの延命を画策せんとした最後の悪あがきも、南講堂を埋め尽くした赤ヘル部隊の断乎とした規律ある登場の前にはかなく消え去ったのである。

このことは、誰よりもわれわれのみが破防法下の保安処分体制を日帝権力の国内反革命の重要な一環として反撃を組織し、又医療戦線の革命的再編の闘いを責任をもって領導してきたことをいよいよ鮮明にさせた。

われわれは、12・5保全共結成大会を、何よりも現代過渡期世界における日帝権力の性格を鮮明にし、これと対決する武装闘争の広大な陣型構築する質に、二派、四派への批判を媒介にした共産主義政治で獲ちとったこと。そして更に広大な武装闘争を支持し、且つそれを担えるものとして4・14東京大集会に至る闘いを積み重ねてきた。

まさに、一切の諸組織・諸団体が、現実の階級闘争が要請する質に答えていくことが問われており日本医学会総会に対抗して始められた反日本医学会の位置も、権力問題と党派再編の（宮下・明治・蜂起・戦争派の三分解）どの部分と結合するのか、をアイマイにすることは出来ないのである。

昨年4・5反日本医学会総会における日向派とのゲバルトは、単に共産同内部の「ゲバ」に限ることの出来ない階級闘争全体の飛躍を問うものとしてあり、かつ、既に反日本医学会の闘争主体の質を問うた第一段であり、われわれは4・5の勝利と今新らたに明治二派の解体・再編を含めた部分との闘争勝利しつつあるし、われわれ以外に共産主義を勝利させることは出来ない。

6日 南構堂を立すいの余地なく埋めつくし、反日本医学会総会が行われていった。

「海外侵略・国内治安と医療」にあてられていた第四分科会は実体化しつつあるSEAMO構想、防衛医大設置や、沖縄の医療日帝の侵略・反革命に伴う医療のそれへの加担、ないしは「医療」の階級的位置を陰弊して登場する「医の幻想性」を最大限利用した海外侵略の尖兵としての位置が暴露され、次に市民組織からの闘争報告、精神医療保安処分をめぐって烏山病院を含めた各病院闘争の報告、全国PSY共闘宇都宮氏からの発言、東大赤レンガの病棟の「患者」さんからの闘争報告、等々が次々と行われていった。

集会の最期を医学連委員長で保全共事務局長の山本同志がこれまでの運動の総括と今後の運動の方向性と決意を力強く述べ、圧倒的に「海外侵略・国内治安と医療」の四分科会のヘゲモニーを貫徹していったのである。

また、翌9月7日、神田共立講堂において行われた総会においては、医学連の諸君の登場
完ち取られていったが、
日向一派は登場しえず、
学会総会の全日程を終了
たのである。

当日、医療戦線のメッ
った情況派の諸君と、17
来の医学連運動の路線の
療戦線の方向をめぐって
なったが、医学連運動・
の方向を70年代階級闘争
いかにしていくかの明確
いまだ有せず、17回大会
学連運動を実体的に担っ
学連に対する基準もアイ
った情況派の諸君へ、断
鮮明にすべく彼等の合法
ボケからの「自己否定」
鉄拳が行使されたのであ
会以来、階級闘争は「勝
昨年4・28蜂起戦争派武
「蜂起」購読者諸君!!
全国、全都の最良の同
入しつつある。

爆弾が烈し、銃声の
ったこの時代に勝利し死
るためには、百戦百勝の
ちたてられるには、BU
年の歴史を緒してもまだ
いたばかりであり、共産
内容が我がものにされな
らないのである。共産主
において組織する党と、
主義政治の貫徹なくして
代大衆武装の延長に終る
タ派の認識運動の党ー革
るか、不断にブレつづけ
イズムー民族共産主義に
ろう。

共産主義政治の貫徹は
現実の階級攻防を見捨え
して提起される。

現下の階級攻防のなか
然軍団ーAIFと医学連
日反日本医学会総会にお
を貫徹した。

われわれは、着実に、
くましく成長している。

連赤に対するマスコミ
コード、赤衛軍事件に対
逮捕、「ポルノ」解禁に
圧迄含め、そして、刑法
・保安処分体制として狂
命は、総じて破防法体制
行している。

この破防法体制の常態
蜂起戦争派の新らたな武
引き出した反革命だし、
今、これを連合赤軍＝日

スローガン

★狂乱の反革命に対決し全人民的反撃を蜂起・世界革命戦争の旗の下に組織せよ！
★侵略派兵開始の五・一五を前段直撃で帝軍解体開始の日に転化せよ！
★日帝の沖縄軍事支配に対する現地の怒りを本土の前段直撃で派兵自衛隊に突き刺し根底的動揺に叩き込め！
★釣魚台の中国「労働者国家」帰属を認め、日帝の「尖閣列島」領有併合の策動を粉砕せよ！

4・28首都を席巻し 東京叛軍が実行委を領導

蜂起戦争派三百名結集

沖縄派兵を直撃せよ

獄中からのアピール

北ベトナム軍、解放戦線と共に帝軍解体を！

辻村周平

党に組織された軍で反撃せよ！

佐久間康夫

佐久間同志の求刑を弾劾する！

共産同弾対

10・21被告団に対する弾圧を粉砕せよ！

5・9公判闘争

5・9集会報告 階級的労働運動の止揚を

獄中同志奪還の為の圧倒的カンパを

打ち砕け、鉄格子

定価三五〇円　保全共刊

蜂起社でも取扱います

蜂起の定期購読を！
半年分　600円
1年分　1200円（郵送料共）
蜂起社03（446）0832.（振替）東京1512

鉄の戦線 3号　全国書店で好評発売中　400円（〒65円）

主要内容

はじめに

一、我々の政治主張

☆非合法党の体系的領導下・今秋闘争に先進国武装闘争の火柱を

☆世界プロ独と中国外交……杉田正夫

一、党の軍事戦略と軍紀

☆攻撃の軍事戦略とは何か

☆共産主義者諸君に打ち固め党風と軍紀に続けよ

一、攻撃的非合法党の組織体系

☆帝国主義の侵略反革命勢力と対決する蜂起・戦争派報軍行動委員会を結成せよ…山下闘士

☆破防法弾圧と闘う会を武装闘争の陣型として構築せよ……青樹繁雄

革命論

一、我々の革命論の到達点

一、蜂起を組織する軍一党への道……羽山太郎

一、唯物史観と「資本論」「帝国主義論」〈冒頭合宿レポート〉……日野弘毅

☆西部地区合宿レポート……町田必殺

☆北部地区合宿レポート……須藤一鉄

☆南部地区合宿レポート……さらぎ徳二

黒田体系の根底的解体

序、黒田理論体系は如何に解体すべきか

一、「行為的現在における場所的立場」批判

二、西田哲学を批判する党の実践的根拠とは何か

三、黒田二段階論批判

鉄の戦線編集委員会

世界暴力革命論 ―現代革命の理論体系― さらぎ徳二著 定価800円

鉄の戦線No.1 ―過渡期世界論特集― 残部少数 定価300円

鉄の戦線No.2 ―共産主義と軍事特集― 好評発売中 定価400円

破防法弾圧と ―いかに闘うか 2号 定価200円

本パンフは昨年8月23日の準備集会あるいは9月の集会で配布されたものです

私書箱中止のお知らせ

蜂起社

電話〇三（四四六）〇八三二

振替東京一五一二二